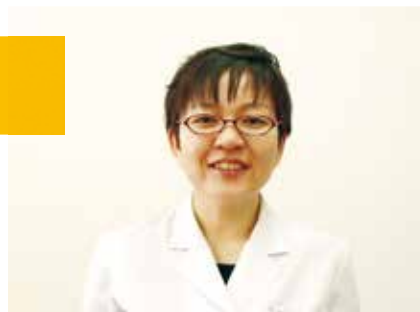


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第16回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



おとし、祖母を亡くした。

自分にとって大きな出来事だった。祖母は14年間話ができない、寝返りもしていない時間をすごし、101歳を目前に天寿をまっとうした。危篤となってからも1ヵ月半ほど、この世にとどまった。その間、いろいろなことを教えてくれた。宿題が多すぎて、私はまだ消化できていない。

最期を覚悟して訪ねたとき、祖母は、口元から小さなけいれんが顔中に広がるのと、それが治まるのをとを10分間隔で繰り返していた。呼んでも手を握っても反応がない中で、けいれんは祖母に苦痛を与えているように見えたが、私たちはそれを抑えられず、ただ見守った。見守る以外にない、悲しいけれど静かな時間で私たちは祖母の枕元でお茶を点て、昔話をした。

普段、在宅看取りの現場で聞く言葉が本当ならいいなと思った。「意識がなくても、みんなの気配は感じている。だから、手を握ったり、話しかけてあげるといいよ」。いかにも本当であるかのように自分の親族にもすすめた。

*

ちょうど同じころ、ご主人を亡くしたご遺族のお宅を訪問した。そこで奥様から、「ねえ、山根さん。死ぬ間際に、感覚はどれほど残っているのでしょうか」と尋ねられた。

亡くなる直前のご主人は働き盛りの年齢で、急激に動けなくなった身体機能に直面して、病気に打ち勝てないかもしれない事実を受け入れようと苦悩しておられた。その後、トルソー症候群なのだろうか、脳出血があり、半身不随となられた。あるとき、奥様と私

は、ご主人から「生を短くする医療はないか」とすら言われた。

亡くなったのはその数日後で、最期の夜のことを奥様が話してくれた。痛みか、苦しさか、顔を歪める意識のないご主人のそばで、ドクターを呼ぶべきか、それとも、もうこれ以上は生きたくないと訴えたご主人の希望を尊重し、何もせず、ただそばにいるべきか、苦悩しながら夜明けを迎えたという。淡々とした口調だった。

「死の直前、しんどそうに見えても、本人の意識レベルが落ちていると、苦痛は見た目ほどではない場合がある。こちらが思うほどに苦しまず、そのときを待っている状態だ」——。聞きかじりの慰めの言葉が頭をよぎったが、言えなかった。祖母の感覚が最期まで残っているように心から願っていた自分が、この言葉を口にするのは誠実ではない。「上手に慰める」のは失礼だと感じた。

*

患者さんの最期の時間にかかわらせてもらうようになって以来、医療人を「演じる」ことが陳腐に思われてならない。白衣を着ているときは「人格者」、就業後が本当の自分。オンとオフを大切に。そんなふうには賢く働いている気でいたが、「人格者」の自分は、患者さんの顔を本当には見ていないのではないか。大事な人の、大事な時間を真剣に考えている人たちと会話するのに、「演技」は通用しない。どんなに未熟でも真心で向き合う以外に私には術がないように思う。心も技も体も、24時間365日医療人になれたらと願うが、なかなか難しい。